

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：33941

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K12235

研究課題名（和文）SLE女性患者のBFの獲得を促進するアピアランスケアプログラムの構築

研究課題名（英文）The effectiveness of makeup therapy nursing support in promoting benefit finding in adult female systemic lupus erythematosus patients with appearance distress

研究代表者

カルデナス 暁東（CARDENAS, XIAODONG）

日本赤十字豊田看護大学・看護学部・教授

研究者番号：80434926

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は外見変化のあるSLE女性患者に対するメイクセラピーを取り入れた看護支援による患者のベネフィット・ファインディング獲得に関する効果を評価することを目的とした。外見変化のある10名の患者に、メイクセラピーを取り入れた看護支援を行った。実施前と1か月後に有益性の発見尺度と生活の質評価尺度SF-8得点の変化を用いてその効果を評価した。有益性の発見尺度の「宗教心の活性化」を除き、他の5因子の得点に有意な上昇がみられた。SF-8尺度の「体の痛み」「活力」「社会生活機能」「精神的サマリー得点」に有意な改善、ほかの側面にも改善傾向がみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義：本研究では、対象者数が少なかったが、対象者の主観的な観点から、再現性が低いとされがちな化粧心理学と心理学的理論を踏まえたメイクセラピーを看護学に取り入れ、新たな看護援助として、対象者のベネフィット・ファインディングの獲得における効果が検証された。

社会的意義：外見変化といったストレスは完全に排除することが不可能であっても、対処法を身につけたうえで、自分自身の病気体験への肯定的認知であるベネフィット・ファインディングが獲得できれば、患者が病気とともに生きることに適応でき、QOLの向上につながると期待できる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to validate the effectiveness of makeup therapy nursing support in promoting benefit finding in adult female systemic lupus erythematosus (SLE) patients. In this study, we provided makeup therapy nursing support to 10 female SLE patients. We then evaluated the effectiveness of the makeup therapy nursing support using the Benefit Finding Scale and SF-8 Health Survey. After the makeup therapy nursing support, the scores improved significantly on all of the Benefit Finding Scale except for "Revitalize Religious Spirit," and on the SF-8 constructs of "Bodily pain," "Vitality," and "Social functioning, as well as the "Mental component summary."

研究分野：慢性看護学

キーワード：慢性看護 自己免疫 外見ケア

1. 研究開始当初の背景

全身性エリテマトーデス (Systemic Lupus Erythematosus, 以下 SLE とする) は 20~40 歳代女性に好発する自己免疫疾患である。患者数においては、近年増加傾向がみられている (難病情報センター, 2023)。治療には主にステロイド剤を用いており、自己免疫抑制剤を併用することもある。ステロイド剤と自己免疫抑制剤は高い治療効果をもたらすと同時に多彩な副作用が生じることがある。そのうち、患者のボディイメージの変容をもたらす副作用として、色素沈着、ムーンフェイス、中心性肥満などが挙げられる。これらの外見変化を有害あるいは脅威として認知した患者は、これまで当たり前であった考え方や行動の変化を強いられ、周囲の人々の関わりを自ら遮断したりネガティブな感情を抱いたりする (Cornwell C.J. et al, 1990; 福田, 2005; 前田ら, 2014)。このことによって、患者の生活の質 (Quality of Life, 以下は QOL とする) の低下を招きかねない。

患者の病気への適応と QOL の維持・向上を支援するために、患者の病気に対する認知へのアプローチが必要である (橋本, 2013)。近年、患者は病いなどの逆境経験から肯定的側面を見出すことをベネフィット・ファインディング (Benefit Finding) として概念化されており、患者がストレスフルな状況に適応していく上で重要な認知的反応として捉えられている (Helgeson, V. S. et al, 2006; Stacey L Hart, et al, 2008)。ベネフィット・ファインディングは患者の精神面の健康に良好な影響を与える (Patricia L. Tomich et al, 2004; 黄ら, 2012) ため、がん患者や精神疾患患者を対象とした研究が行われ、患者のベネフィット・ファインディングを評価する尺度も開発されている (千葉ら, 2015; 黄ら, 2012; 安藤ら, 2014)。

SLE をはじめとした自己免疫疾患患者のベネフィット・ファインディング尺度がないものの、膠原病患者の BF 特性として、困難に対処していけると思えるようになった 自分自身を大切に生きてみようと思うようになった 感謝の気持ちが深まった 他者の痛みに共感できるようになった 新しい友人と出会うことができた 他者に貢献したいと思うようになった といった、自身の人格的な成長や家族を含めた周囲の人々への感謝が報告されている (佐藤, 2007)。

2021 年にがん患者の外見変化へのケアを集約しているガイドラインが出版され (日本サポートタイプケア学会, 2021)、医療分野において外見ケアが注目されつつある。美容分野と異なり、医療分野における外見ケアの目的は審美ではなく、患者の QOL の維持・向上につながる「その人らしく生きる」ことを支えることにある (飯野, 2019)。外見ケアの一つであるメイクアップにはリラクゼーションなどの心理的効果 (森地ら, 2006) や、その人の自分らしさを演出し、社会生活における対人コミュニケーションを円滑にする効果 (大坊, 2009; 池山, 2019) がある。外見変化といったストレスは完全に排除することが不可能であっても、対処法を身につけたうえ、自分自身の病気体験への肯定的認知であるベネフィット・ファインディングが獲得できれば、患者が病気とともに生きることに対応でき、QOL の向上につながると期待できる。そこで、本研究では、外見変化のある成人期 SLE 女性患者にストレス対処法を提供すると同時に、患者のベネフィット・ファインディング獲得における効果を期待し、メイクセラピーを取り入れた看護支援を実践し、その効果を評価する。

2. 研究の目的

本研究は、メイクセラピーを取り入れた看護支援は疾患または治療によって外見変化が生じている SLE 成人期女性患者のベネフィット・ファインディング獲得における効果を評価することを目的とした。

3. 研究の方法

1) 研究デザイン

単群前後比較デザインを用いた。

2) 研究対象者

対象者の選定基準を研究施設に定期受診しており、かつ疾患と治療による外見変化のある 20~65 歳の SLE 女性患者とした。研究施設の病院長と看護部長の許可のもと、担当医師に研究内容の説明を行い、選定基準に合った患者の紹介を依頼した。また、担当医師から紹介を受けた患者に研究者が文書を用いて口頭で研究の説明を行い、研究の同意が得られた患者を本研究の対象者とした。COVID-19 感染拡大の影響を受け、ノーマスクでメイクアップできない状況が続き、対象者人数は最終的に 10 名となった。

3) 研究枠組み

本研究の枠組みは、Lazarus & Folkman のストレス・コーピング理論を用いたものである。メイクセラピーを取り入れた看護支援は対象者のストレスと認知の 2 つの部分にアプローチする。ムーンフェイスなどの外見変化というストレスに対して、対象者が語った【なりたい自分像】を日常メイクで表現する。そして、認知に対しては、対象者に【なりたい自分像】の理由とそれに関連する病気の体験について語ってもらうプロセスの中で、療養生活における困難

な側面だけではなく、病気の体験の中から肯定的な意味づけの側面を見出すこと、つまりベネフィット・ファインディング獲得を促す。その結果、対象者は病気と外見変化とともに生きることに対応でき、自身のQOLの向上をもたらす。

4) 調査方法

(1) メイクセラピーを取り入れた看護支援の内容

研究施設の個室にて、研究の同意が得られた対象者に対して、個別に実施した。7分程度の質問紙への記入時間を含め、実施時間は平均75分であった。看護支援は以下の4つの内容によって構成される。また、物品には研究者が準備した基礎化粧品(化粧水、乳液、クリーム、日焼け止め)、ポイントメイク用コスメティックス(眉ブロウ、アイシャドー、アイライナー、マスカラ、ファンデーション(普通用・カバーメイク用)、フィニッシュパウダー、チーク、口紅)、化粧筆、スポンジ、コットン、鏡を使用した。

メイクセラピスト資格を有する研究者は、対象者が回想した発症当時から現在に至った体験、語った【なりたい自分像】とその理由を共有する。それと同時に、語りの中にある対象者のベネフィット・ファインディングを言葉で対象者にフィードバックする。

次いで、ビフォーとアフターを比較することと、残りの半分の顔に対象者にメイクの練習してもらう目的で、研究者は対象者の顔のパーツバランス(目鼻立ち)を活かし、顔の半分に対象者の【なりたい自分像】を日常メイクで表現する。

半顔のメイクを施した後、対象者の顔の中で作られたビフォー・アフターに基づき、【なりたい自己像】を日常メイクで表現したことによって、【これまでの自分】との違いや今後の生活に与えりうる影響をテーマに、対象者に語ってもらう。

研究者がメイクした半顔を手本にしなが、残りの半分の顔を対象者自身がメイクする。その翌日から、対象者自身ができるようになることが目的であるため、カバーメイク用のファンデーションの色合わせ方、ベースメイクから眉ブロウ、アイシャドー等のカラーセレクトやつけ方についてのメイクテクニックをアドバイスする。

(2) データ収集方法・内容

実施直前と実施1か月後(翌月の定期受診時)に、患者の基本属性として、年齢、婚姻状況、職業状況、薬物療法の種類に加え、以下の2種類尺度を用いてデータ収集を行った。

『QOL 評価尺度(SF-8)』:

SF-36より回答時間が短く、国民調査から得られた国民標準値に基づいたスコアリングとの比較で、8つの領域の健康状態を判断することができる(福原ら, 2012)。健康状態を測定し、包括的で多目的に使用できる短縮版尺度である。8つの領域(全体的健康感(GH)、身体機能(PF)、日常役割機能(身体)(RP)、体の痛み(BP)、活力(VT)、社会生活機能(SF)、心の健康(MH)、日常役割機能(精神)(RE))をそれぞれ1項目ずつで測定するように構成されている。本研究では実施1か月後に評価を行うため、今回は1か月バージョンを使用した。

『ベネフィット・ファインディング尺度(BFS)』:

精神疾患患者を対象に開発された尺度(千葉ら, 2015)や、がん患者を対象に開発された尺度(Andoら, 2010)があるが、佐藤(2007)が報告した膠原病患者のベネフィット・ファインディングの特性を踏まえ、本研究ではがん患者を対象に米国で開発され、日本国内でも、地域のがん患者を対象とした研究に使用されている尺度(黄ら, 2014)を使用した。

この尺度は「第1因子: 肯定的人生観の獲得(7項目)」「第2因子: 人間としての人格的な成長(5項目)」「第3因子: 家族への愛情の深まり(5項目)」「第4因子: 友人関係の広がり(3項目)」「第5因子: 感謝の念の深まり(3項目)」「第6因子: 宗教心の活性化(2項目)」によって構成されている。「全くあてはまらない(1点)」から「とてもあてはまる(7点)」の7段階のリッカート式で、得点の高いほうがベネフィット・ファインディングの獲得状況がよいと評価される。

5) 分析方法

実施前後の2種類の尺度のトータルスコア及び下位尺度の平均値と標準偏差を算出した。実施前後のSF-8スコアとBFSスコアの変化をノンパラメトリック検定であるWilcoxon符号順位検定を行った。有意差を5%とし、解析にはSPSS statistic 23 for Windowsを使用した。

6) 倫理的配慮

『本研究への参加が自由意思であり、参加に同意しない場合でも治療・看護などにおいては不利益を受けないこと』『施設や個人のプライバシーは厳守すること』『得られたデータは研究目的以外に使用しないこと』『本研究への参加に同意された後でも、いつでも撤回でき、その場合でも不利益を受けないこと』『収集した諸データは研究代表者の所属機関の施設可能な場所に保管し、すべてのデータは研究のすべてのプロセスが完了した後で破棄処分する』ことを明文化し、書面および口頭にて説明を行い、同意書への署名をもって同意を得た。なお、本研究は所属した大学倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。

4. 研究成果

10名対象者の平均年齢が35.3±8.4歳で、未婚者が2名、既婚者が8名(うち7名は子どもがいる)、有職者が9名であった。顔面に紅斑のみの対象者は3名、紅斑とステロイド薬の副作用であるムーンフェイスのある対象者は4名、色素沈着とムーンフェイスのある対象者は2名、ステロイド性ざ瘡の皮膚瘢痕と色素沈着のある対象者は1名であった。10名のうち4名を対象者

はステロイド剤のみ、ほかの 6 名はステロイド剤と生物学的製剤の併合内服薬物療法を受けていた。

1) 実施前後の BFS スコアの変化

BFS の第 2 因子「人間としての人格的な成長」スコアは 18.4 ± 4.8 から 21.8 ± 5.9 に ($p=0.007$)、第 4 因子「友人関係の広がり」スコアは 11.3 ± 3.2 から 13.9 ± 3.5 に ($p=0.007$)、第 5 因子「感謝の念の深まり」スコアは 19.2 ± 2.2 から 20.3 ± 1.3 に ($p=0.042$)、トータルスコアは 107.4 ± 11.2 から 121.6 ± 12.5 に ($p=0.008$)、実施前より実施 1 か月後は有意に高くなった。

第 1 因子「肯定的人生観の獲得」、第 3 因子「家族への愛情の深まり」スコアは前後に有意差がなかったが、実施前より実施 1 か月後は上昇した。しかし、第 6 因子「宗教心の活性化」では、実施前後とも低かった。

対象者の BFS 第 1 因子「肯定的人生観の獲得」、第 3 因子「家族への愛情の深まり」スコアは前後とも高かったことから、本研究の対象者は家族をはじめ安定した人間関係の構築ができ、肯定的な人生観を持っているバックグラウンドを有するものであったことが推測される。このような特徴のある対象者は本研究の【なりたい自分像】の語りのプロセスを通して、自分の病気の体験を振り返り、「病気とともに生きる自分」と向き合い、発病から現在に至って家族を含め周囲の関係者からのサポート状況、病気の体験を通して成長した自分の強みが再確認できた。

対象者にとって、疾患や治療による外見変化といった困難であった経験に向き合い、家族を含めた信じられる他者の存在との関係性において、【なりたい自己像】を自分の言葉で語り、「SLE 患者としての自分」「自分の人生の意味/大切なこと」について改めて認知する機会となった。さらに、メイクアップの際に鏡に向かうことは自己意識や自己洞察の効用、内省的傾向を高める効果をもたらす(大坊, 2009)ため、対象者は【なりたい自己像】を日常メイクで表現していく中で、より自分自身が価値のある存在であることを認知することにつながった。

その結果、実施後第 2 因子「人間としての人格的な成長」、第 4 因子「友人関係の広がり」、第 5 因子「感謝の念の深まり」のスコアとトータルスコアにおいては、有意な上昇、第 1 因子「肯定的人生観の獲得」、第 3 因子「家族への愛情の深まり」のスコアにも上昇がみられ、BF 獲得において効果があったといえる。

しかし、今回は BFS の第 6 因子「宗教心の活性化」スコアにおいては、前後とも低かった。欧米人と異なり多くの現代日本人は、宗教と自覚的に意識されることなく、特定の宗教に傾倒せず風習として受け入れられている、いわば宗教に対して消極的否定論を持っている(金児, 2003)。また、全世代では 3 割程度の日本人は何らかの宗教を信仰しているが、18~39 歳では 2 割弱となると報告されている(小林, 2019)。これらのことから日本人は病気の体験の中で宗教の側面からの意味付けが難しいと推測される。

2) 実施前後の SF-8 スコアの変化

「体の痛み(BP)」スコアは 48.47 ± 8.31 から 54.34 ± 7.60 に ($p=0.026$)、「活力(VT)」スコアは 50.04 ± 4.78 から 53.77 ± 5.67 に ($p=0.038$)、「社会生活機能(SF)」スコアは 46.13 ± 10.01 から 51.61 ± 8.45 に ($p=0.039$)、「精神的サマリースコア(MCS)」は 45.49 ± 9.93 から 51.95 ± 6.19 に ($p=0.037$)、実施前より実施 1 か月後には有意な改善がみられた。他の領域のスコアでは、有意差がなかったものの、改善の傾向がみられた。

また、「体の痛み(BP)」、「社会生活機能(SF)」、「日常役割機能(精神)(RE)」、「心の健康(MH)」の 4 つ領域のスコアと「精神的サマリースコア(MCS)」は、実施前では日本国民標準値より低かったが、実施 1 か月後は高くなった。しかし、「身体機能(PF)」、「日常役割機能(身体)(RP)」の 2 つ領域のスコアと「身体的サマリースコア(PCS)」は、実施前後とも、日本国民標準値より低かった。

さらに、「活力(VT)」スコアは実施前の日本国民標準値とほぼ同値で、実施 1 か月後は高くなり、「全体的健康感(GH)」スコアは、実施前は日本国民標準値より低かったが、実施 1 か月後は同値となった。

メイクセラピーを取り入れた看護支援は対象者の認知へのアプローチ以外に、外見変化といったストレスへのアプローチでもあった。対象者が語った【なりたい自分像】を日常メイクで表現し、ムーンフェイスなどの外見変化といったストレスへの対処となった。その結果、QOL を評価する SF-8 の「体の痛み」「活力」「社会生活機能」スコア、「精神的サマリースコア」は有意な改善がみられ、他の領域のスコアでは、有意差がなかったものの、改善の傾向がみられた。また、実施後の「体の痛み」「社会生活機能」「日常役割機能(精神)」「心の健康」「活力」スコア、「精神的サマリースコア」は日本国民標準値より高くなった。

一方で、「身体機能」「日常役割機能(身体)」スコアと「身体的サマリースコア」は、実施前後とも、日本国民標準値より低かった。このことから、病気の症状や治療の副作用により患者の身体面への影響が大きい現状と窺える。とはいえ、「有害」あるいは「脅威」と認知されたストレスである外見変化をメイクテクニックで修正・カバーできたことに加え、自分の病気の体験を通して語った【なりたい自分像】を日常メイクで表現できたことは、対象者にとってストレスとなる事象への対処となり、対象者の「病気とともに生きること」への適応につながり、精神面と社会面の QOL の向上といった結果をもたらした。

今回は、対象者は自分の病気の体験を振り返り、周囲の人々の支えを受けながら自分自身の人間としての人格的な成長や自分の人生において病気の体験を意味付けたことで、精神面と社会面の QOL に良い影響を及ぼしたと考えた。

文献

- Ando, M., Morita, T., Hirai, H., Akechi, T., Kira, H., Ogasawara, E., & Jingu, K. (2010). Development of a Japanese Benefit Finding Scale (JBFS) for patients with cancer. *American Journal of Hospice & Palliative Medicine*, 28(3), 171-175.
- カルデナス暁東, 大塚俊宏, 森脇真一, 他 4 名 (2014): ボディイメージの再形成に向けたメイクセラピーを取り入れた看護ケアを実施した皮膚筋炎女性患者の 1 例, *大阪医科大学雑誌*, 73 (3), 81-85.
- カルデナス暁東, 田中克子, 森脇真一, 他 1 名 (2015): メイクセラピーを融合したスキンケア指導を通して生活の質を高めたアトピー性皮膚炎成人期女性患者の 1 例, *大阪医科大学雑誌*, 74 (第 1・2 合冊号), 51-55.
- 千葉理恵, 山崎喜比古, 宮本有紀, 他 1 名 (2015): 精神疾患を経験した人々のベネフィット・ファインディング評価尺度の作成の試み, 第 35 回日本看護科学学会学術集会講演集, 514.
- Cornwell C.J., Schmitt M.H. (1990): Perceived health status, self-esteem and body image in women with rheumatoid arthritis or systemic lupus erythematosus, *Research in Nursing Health*, 13: 99-107.
- 福原俊一, 鈴鴨よしみ (2012): SF-8TM 日本語版マニュアル 第 2 版, 特定非営利活動法人健康医療評価研究機構, 京都.
- 福田和明 (2005): 全身性エリテマトーデス女性患者の他者との関係性における体験, *日本看護科学会誌*, 25 (2): 56 - 64.
- Jesse.H.Wright, Gregory K.Brown, Michale E. Thase, et al, 大野裕, 奥山真司監訳 (2021), 認知行動療法トレーニングブック, p1 2, 医学書院, 東京都.
- 橋本空 (2013): 慢性疾患患者における病気認知およびアドヒアランスの研究動向, *江戸川大学紀要*, 23, 61-167.
- Helgeson, V. S., Reynolds, K. A., & Tomich, P. L. (2006). A meta-analytic review of benefit finding and growth. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 74(5), 797-816.
- 池山和幸 (2019). 「粧う」ことで健康寿命を伸ばす化粧療法, クインテツセンス出版株式会社, p16.
- 飯野京子他 (2019). がん治療を受ける患者に対する看護職のアピアランス支援の実態と課題および研修への展望, *Palliat Care Res*, 14(2). 127-38.
- 岩井結美子 (2011): メイクセラピー検定 2 級対策, 48-54, NPO 法人日本人材教育協会 メイクセラピー検定事務局, 東京都.
- 金児暁嗣 (2003): 日本における近代的価値観と宗教意識の変質, *都市文化研究*, 1 巻, 23-35.
- 黄正国, 兒玉憲一, 荒井佐和子 (2015): 地域がん患者会参加者のベネフィット・ファインディングとメンタルヘルスの関連, *Journal of Japan Clinical Psychology*, 32 (5), 545-555.
- 黄正国, 兒玉憲一 (2014): 地域がん患者会の参加者におけるソーシャルサポートの授受と心理的適応との関連, *広島大学大学院教育学研究科紀要*, 第三部, 第 63 号, 57-65.
- 黄正国, 兒玉憲一 (2012): がん患者会のコミュニティ援助機能とベネフィット・ファインディングの関連, *Palliative Care Research*, 7 (2), 225-230.
- 小林利行 (2019): 日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか ~ ISSP 国際比較調査「宗教」・日本の結果から ~, *放送研究と調査*, 4, 52-72
- 前田 祥子, 鹿村 真理子, 水田 真由美, 他 4 名 (2014): 全身性エリテマトーデス患者のボディイメージに関する文献レビュー, *日本看護研究学会雑誌*, 37 巻 2 号, 91-101.
- 難病情報センター: <https://www.nanbyou.or.jp/entry/53> (難病情報センターHP TOP > カテゴリ > SLE). 2023 年 10 月 26 日アクセス.
- 日本がんサポーターズ学会編 (2021). *がん治療におけるアピアランスケアガイドライン*, 金原出版, 2021.
- 大坊郁夫編集 (2009): 化粧行動の社会心理学 化粧する人間のところと行動, 6-8, 103-134, 北大路書房, 京都.
- Patricia L.Tomich, Vicki S.Helgeson (2004): Is Finding Something Good in the Bad Always Good? Benefit Finding Among Women With Breast Cancer, *Health Psychology*, 23(1): 16-23.
- 佐藤三穂 (2007): 膠原病を持つ人におけるベネフィット・ファインディングの特性とその獲得に関連する要因, *看護総合科学研究会誌*, 10 (2): 16 - 25.
- Stacey L Hart, Lea Vella, David C Mohr (2008): Relationships among depressive symptoms, benefit-finding, optimism, and positive affect in multiple sclerosis patients after psychotherapy for depression, *Health Psychol*, 27(2), 230-238.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 カルデナス暁東, 田中克子, 藤木陽平, 森かな恵, 森脇真一	4. 巻 80(3)
2. 論文標題 SLE女性患者一症例に対する「有益性の発見」の獲得と精神状態の改善をもたらす アピアランスケアプログラムの効果	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪医科薬科大学医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 32 40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 カルデナス暁東
2. 発表標題 SLE成人期女性患者のベネフィット・ファインディングの獲得を促進する アピアランスケアプログラムの構築
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Xiaodong Cardenas
2. 発表標題 Establishment of a Make-up Appearance Care Improvement Mental State for Adult Female Patients with Chronic Disease
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Xiaodong Cardenas, Katsuko Tanaka
2. 発表標題 Establishment of a Make-up Appearance Care Improvement Mental State for Adult Female Patients with Chronic Disease
3. 学会等名 6th World Academy of Nursing Science
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------